断章

旭川のアイヌ語地名研究 ④

―忠別川は鮭の豊漁川―

忠別川は、特に鮭の遡上が多い川で、元来のアイヌ語名はそれに由来している。まず、忠別川の鮭に関連するアイヌ語地名を見ると、東川町の江卸発電所とフカナンの間の小さな川が、カムイチェポッナイ（kamuycep-ot-nay鮭・乱入する・川）。東神楽町志比内川は、永田地名解は、シペナイ（sipe-nay鮭・川）で、間宮林蔵、松浦武四郎も同じ表記で、明治二十年代にもコタンがあり、地元での聞き取りでも鮭がとれたことが確認できた。

右記は忠別川上流の支流だが、中流では、地図の①現・南六条川のアイヌ語名は、チェポッメム（cep-ot-nem鮭・多く入る・泉池）。鮭の付くアイヌ語地名はこれだけだが、前号で紹介した、②現・アイヌ川のキムクシペッ、③現・ポン川のフシコチュクペッなどにも、鮭が盛んにのぼったという。

明治二十一年生まれで、大正・昭和と旭川の郷土研究のリーダーであった斎藤譲三は、③の旭川市旭神町在住だった石川タカラコレからの貴重な記録を残してくれた。タカラコレは、文政十二年（一八二九年）生まれで、旭神町のコタンに明治二十年代まで居住しており、かつて、安政五年の松浦武四郎の十勝越えの時に、旭川までの案内人の一人でもあった。タカラコレの話では、地図周辺の支流河川は、「晩秋になると、鮭群の遡上で川水は生臭くて飲めなかった」という。また、「春から鹿の群れを神楽岡山裾に追い込んで捕らえ」る好猟場でもあったという。それ故、間宮図のように忠別川の両岸にコタンと左岸の③フシコチュクペッに番屋（交易所）が設置されたのである。

斎藤はまた、「忠別川清流は魚族が豊かで、殊に鮭の遡上が多かった。忠別太から東川村西部までが、一連して好個の漁場で大忠別をなしていた。『旭川』という地名を考えると、漁利によって名付けられた。チユプ（旭）ペツ（川）、またはチエツプ（魚）ペツ（川）だとも上川古老アイヌは語っているが、いずれにせよ、その一致するのはともに豊漁を語っていることである」と書いたが、忠別川の本来のアイヌ語名のチュクペッは、既に忘れ去られていたのであった。

実証的アイヌ語地名研究を確立した山田秀三は、羽幌町の築別川、浦幌町と音別町境界の直別川のアイヌ語名の類推から、忠別川のアイヌ語名をチュク・ペッ（cuk-pet秋・川）、すなわち、チュク・チエプ（cuk-cep秋の・魚→鮭）が、秋になると盛んに上る川だったので、命名されたと指摘した。山田が見ることがなかった近藤重蔵、間宮林蔵等の踏査者の記録等でもそれが検証された。

山田秀三は、後年、筆者に私信で、チュクペッ（ci-i-uk-pet我ら・それ＝鮭を・捕る・川）という試案を提示されたので、ここで紹介させていただく。

高橋基・アイヌ語地名研究会幹事

（毎月第1週に掲載します）